

東日本大震災がきっかけでスタートした「千の音色でつなぐ絆」プロジェクト —震災復興を奏でる「TSUNAMI VIOLIN」

未曾有の大災害が2011年3月11日に日本を襲う

2011年3月11日14時46分頃に発生した東日本大震災。三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近で、深さ約24kmを震源とする地震だった。マグニチュードは9.0で、1952年のカムチャッカ地震と同じだった。これは日本国内観測史上最大規模で、アメリカ地質調査所（USGS）の情報によれば、1900年以降、世界でも4番目の規模の地震だった。

遡上高（陸地の斜面を駆け上がった津波の高さ）では、全国津波合同調査グループによると、国内観測史上最大となる40.5mが観測された。

被害状況については、震災後9年が経過した2020年でもいまだ行方不明者が多く、全容が把握されているとは言い難い。2019年12月10日時点で、震災による死者・行方不明者は1万8428人、建築物の全壊・半壊は合わせて40万4893戸確認されている。震災発生直後のピーク時においては、避難者は約47万人、停電世帯は800万戸以上、断水世帯は180万戸以上と報告されている。

そんな未曾有の大震災の復興を願って、翌年の2012年3月11日、世界最高齢の現役ヴァイオリニストであるイヴリー・ギトリス氏による献奏が行われた。献花が行われている間、ずっとギトリス氏が寄り添うように鎮魂曲を捧げた。献奏が行われたヴァイオリンは、津波で流された流木で造られた「TSUNAMI VIOLIN」だった。



「TSUNAMI VIOLIN」製作者・中澤 宗幸さん

これによって、「千の音色でつなぐ絆」プロジェクトがスタートした。追悼の想いと復興への願いを音色に乗せ、「TSUNAMI VIOLIN」を1,000人のヴァイオリニストがリレーのように弾き継いでいくプロジェクトであり、現在も続いている。

このヴァイオリンの製作者は中澤 宗幸さん。妻のヴァイオリニスト中澤きみ子さんと二人三脚でこのプロジェクトを牽引してきた。今回はこのご夫婦に「TSUNAMI VIOLIN」の製作経緯からプロジェクトの現状までをお伺いした。

「あれは瓦礫の山なんかじゃない。家族の思い出と歴史の山だわ」という妻の言葉に背中を押される

震災当日の2011年3月11日、中澤 宗幸さんは東京都渋谷区の自宅にいた。その時、数億円するストラディヴァリの10本のうちの1、2本に入るような楽器の修理を5階の工房で行っていた。それから階上へ上り、妻の中澤きみ子さんと遅い昼食を摂っていた。その時に揺れがきたという。きみ子さんは、怖くて泣きだし、宗幸さんに抱きついた。ところが宗幸さんは、ストラディヴァリのが心配で、すぐに階下へ降りていき確認した。幸い楽器が無事だったことを見届け、再度きみ子さんのところへ戻った。きみ子さんはその時、床で座り込んだまま泣き伏しており、宗幸さんを見上げて「あなたはやっぱり私よりもヴァイオリンを愛しているのね。」と一言。宗幸さんは「それを言われた時は、ちょっと辛かったですね」と照れ笑いをする。



左・ヴァイオリニストの中澤きみ子さん、中央・筆者、
右・中澤 宗幸さん

震災後のテレビでは毎日、どの時間帯も津波の映像が流れていた。その映像の中で毎回出していたのが、陸前高田市の「奇跡の1本松」だった。約700本もあった松の中で、奇跡的に1本だけが残った。被災者は1本松を復興のシンボルとして、自分たちも生き延びなければ、頑張らなければという思いを抱いていたに違いない。その傍らには処分に困っているという瓦礫の山が映し出されていた。

その映像を見て、きみ子さんは涙を流しながら、こうつぶやいた。「あれは瓦礫の山なんかじゃない。家族の思い出と歴史の山だわ。あそこにヴァイオリンを作れるような材料はないの？」

宗幸さんは当初、そんな発想はまったくなかったが、その言葉に背中を押され「TSUNAMI VIOLIN」の製作を始めようと決意したのである。

被災地・陸前高田市を歩き、ヴァイオリンの材料を探す

その後、宗幸さんは同年12月に陸前高田市を訪れた。家業が昔、林業だったこともあり、友人に材木屋さんがいて、自分の工場と製材所を流された陸前高田市の方に連絡を取ってくれた。そのおかげで、その方が車で一関まで迎えに来てくれたという。

宗幸さんはその時見た光景は今でも忘れられない。「何ひとつ建物もない、瓦礫の山が積み上げられている光景です。ビルの上には大きな船が乗っていました。それを見た時、現実とは思えなかったですね。」と語る。そして、様々な所を見て回って使いそうな材料を見つけた。

それが果たして、楽器になるのだろうかという疑問がなかったわけではない。しかし、もし他の木を使うのだったら意味がない。音は二の次で、人の心を打つ「声」を持っていてくれたらいいと思った。

「木というのはみんなそれぞれ声を持っており、日本の木は日本の声を持っています。例えばアメリカ、カナダで育った木は、また違う声を持っています。だから音はどのようであってもいいと思いました。」と宗幸さん。

夫唱婦隨で造り上げた「TSUNAMI VIOLIN」

きみ子さんは宗幸さんの「TSUNAMI VIOLIN」の製作が進むたびに、お付き合いで大変だったという。

「夜中でも起こされました。翌日になるとここまで出来たと報告があります。次は白木になって、ニスが塗られて、弦が張られて、と工程を経ていきます。その都度弾くのですが、ヴァイオリンは弾いて初めて音に変化していくものです。しかも一般的なヴァイオリン用の木ではないため、最初に音を出した時は素の音で、本当に手強かったです。」と語る。

宗幸さんの試行錯誤は続いた。しかし1年、2年、3年と経過するうちに大きく変化を遂げて、きみ子さんが1時間、2時間弾くだけで、音に変化していくのが如実にわかった。そして現在、「TSUNAMI VIOLIN」は700人以上のヴァイオリニストに弾きつがれてきた。

このプロジェクトは「千の音色」と銘打ち、1,000人に弾いてもらうよう活動を続けている。日本では祈りや願いをするときには「千」という数を使うことが多い。例えば千手観音、千手針、千羽鶴など枚挙に暇がない。

実は演奏会自体はすでに1000回を超えている。一人1回だけ弾いたとは数えないからだ。きみ子さんはすでに国内外で14ヶ国、100回以上にわたって弾いている。東日本大震災で一早く義援金を送ってくれた台湾でも演奏した。2018年2月にマグニチュード6.4の大地震の被害があった花蓮へ行ったときには、市をあげて迎えてくれた。また2018年6月にはオーストリア・ウィーン旧市街のフランス風ゴシック様式で建てられた美しいミノリーテン教会で演奏したときは、国営放送でも流れた。



ウィーンの小ノリテン教会



ウィーンにてカルテットのリハーサル

「このヴァイオリンには祈りや願いがあるし、多くの人たちへの鎮魂もあります。まだ忘れてもらいたくないという思いも込めて『千の音色でつなぐ絆』という名前で活動をしてい

るのです。」と宗幸さん。これは被災地である東北のみなさんとの対話の中で生まれた名称だった。

また、ヴァイオリンの裏板には、宗幸さんの古くからの友人である二胡の演奏家で画家の武楽群氏による「奇跡の一本松」をモチーフとした油絵が描かれている。

「TSUNAMI ヴィオラ」を皇太子様がコンサートで演奏

2013年1月17日、東京都千代田区の紀尾井ホールでメキシコ人ヴァイオリニスト、アドリアン・ユストゥス氏の TSUNAMI VIOLIN でのリサイタルが開催され、そこに皇后様（現・上皇后美智子様）がいらっしゃっていた。その時宗幸さんは、7階の貴賓室に呼ばれて、お話をさせて頂いたという。

「現在、ヴィオラも作っています。もし出来上がったら、是非皇太子様（現・徳仁天皇陛下）にお弾き頂きたいと思います。それを持って私は東北を訪れる事が出来たら、どんなにお力を頂けることでしょうか」と申し出た。その時に皇后様からは是非のお返事はなかったものの、一言、「時が参りましたら。」とおっしゃった。皇太子様はかつて学習院大学で学ばれ、大学の管弦楽団に入っており、ヴィオラを演奏されていた。

そして2013年7月7日、東京芸術劇場で開催された学習院大学OB管弦楽団演奏会にて、皇太子様は、シューベルトの交響曲「未完成」を TSUNAMI ヴィオラで演奏された。演奏後、皇太子様は立ち上がり、ステージの最前列へと向かい、ヴィオラをぐるりと裏に返し、描かれていた「奇跡の一本松」の絵を観客に披露された。会場からは割れんばかりの拍手が巻き起こった。そこには天皇皇后両陛下の姿もあった。宗幸さんの願いが届き実現した瞬間だった。その陰には皇后様のご尽力があったことは想像に難くない。



裏板に描かれた「奇跡の一本松」(手前からヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ)。
2020年3月末現在、ヴァイオリン4台、ヴィオラ2台、チェロ2台が製作された。

500人目のヴァイオリニストが「奇跡の一本松」の前で献奏

2017年3月9日、500人目にあたるヴァイオリニスト・岩手県出身の工藤崇氏が奇跡の一本松の前で献奏した。

「TSUNAMI VIOLIN」には、一本松の枝の一部が「魂柱」として中に入っている。魂柱とは、表板と裏板を直接つなげる唯一の棒である。魂柱により音が裏板まで振動し、楽器全体に音が響くようになる。

「この一本松の枝が、楽器の中に命を入れてくれているのです。これがずっと続いて多くの人たちへの慰めとなり、亡くなられた人たちへの祈りとなり、今頑張っている人たちの励ましとなります。被災地の人たちだけでなく、私たちはどこで災害に遭うかわかりません。それに対する警鐘となる事が出来るならば。」と宗幸さんは語る。

危機的状况だからこそ音楽の力で人を癒したい

現在、新型コロナウイルス渦で世界中が苦しんでいる。それについて最後にお二人に聞いてみた。実際に TSUNAMI VIOLIN のコンサートもいくつか延期になった。

「こういう時だからこそ、人の心に寄り添う音楽というものの大切さを感じます。先日、ド

イツの文化大臣の会見がありました。ドイツは音楽の原点の国の一つでもあります。『私たちの国では文化なしで経済は成り立たない』とおっしゃっていて、文化に対する支援のための多額な予算をつけ、素晴らしいことだと思いました。」ときみ子さん。

ちなみにドイツの文化大臣モニカ・グリュッター氏は、「芸術・文化・メディア産業におけるフリーランスおよび中小の事業者に対する無制限の支援」という声明を出した。

2020年3月23日には連邦政府が7500億ユーロ（約90兆円）規模の財政出動を決定した。そのなかで、芸術団体、文化・創造産業に対しては500億ユーロ（約6兆円）を拠出。助成金や貸付といったかたちで当座の運営資金を提供する。加えて、個人の生活維持のために100億ユーロ（約1兆2000億円）を支援し、各種プロジェクトが中止になった場合でも助成金の返還は可能な限り求めないとしている。

宗幸さんはこう語る。「今回の新型コロナウイルスは、世界中が一丸となるようにという神様の啓示かもしれませんね。しばらくは過渡期で苦しいでしょうけど、優しい地球になっていくかもしれないです。」

すかさず、きみ子さんはこう続ける。

「音楽もテクニックオンリーで、コンクールで1位、2位と競うものではなく、本当にみんなを幸せにできるものになっていくのではないのでしょうか。神様がこの世に音楽を作らせたのは、コンクールや刺激のためではなく、人間一人ひとりの心に寄り添うためのものだったはずなのに、どうしてこんなになってしまったのか、と教えてくれているような気がします。」

お二人は東日本大震災後、TSUNAMI VIOLINの献奏で、観客が涙を流すのを何度も目の当たりにしてきた。音楽には人の心を癒す確かな力がある。新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、人々の気持ちが暗くなりがちな現在。だからこそ、音楽の力がより必要とされていくのかもしれない。

参考資料：

『いのちのヴァイオリン—森からの贈り物』（中澤 宗幸 ポプラ社 2012）

Classic for Japan (TSUNAMI VIOLIN PROJECT) <https://classic-for-japan.or.jp/>

株式会社日本ヴァイオリン <https://www.nipponviolin.com/>

#178 TSUNAMI VIOLIN ～未来へ紡ぐ優しき音色～（「日本のチカラ」公益財団法人民間放送教育協会）

http://www.minkyō.or.jp/01/2019/06/nipponnochikara_178.html

「津波バイオリン」の音、奇跡の一本松の下で響く 震災6年前に500人目の演奏（朝日新聞デジタル）

https://www.huffingtonpost.jp/2017/03/09/tsunami-violin_n_15270802.html

文 [奥山 睦](#) (Mutsumi Okuyama)

照片：一般財団法人 Classic for Japan TSUNAMI VIOLIN PROJECT 提供

编辑修改 JST 客观日本编辑部